

文学社小論

清水稔

1

辛亥革命は、1911年10月10日湖北新軍内の革命派兵士が武昌に蜂起したことに始まる。その栄光を担った主要な革命組織は文学社であった。小論では、辛亥革命の性格や革命の必然性を探る前提として、湖北の革命運動のなかから生まれ、武昌蜂起を指導するにいたった文学社を取り上げ、その組織の源流、構成員、政治綱領などについて若干の検討を加えることにする。

2

文学社は、湖北に生まれた科学補習所・日知会・群治学社などの革命結社の組織と伝統を継承した革命団体である。ここではまず文学社に先行する湖北の革命結社の存在形態を湖北における革命運動の展開過程と関連させて素描しておきたい。

1894年11月孫文がハワイで興中会を創設したことによって始まった革命運動は、華僑社会や広東などを舞台にしてその活動の拠点を拡大しつつあったが、その担い手である革命派が、一定の社会的勢力を形成するにいたったのは義和団以後のことである。とくに清朝の実施した新政による教学体系の改変——科挙の改廃・新式学校の設立・留学の奨励などによって、為政者の意図とは裏腹に、清朝の諸政策に批判的な知識人が多数生み出され、改良派（立憲派）・革命派と呼ばれるグループが形成された。年毎に増加の一途をたどった留学生や国内に新たに設けられた学校に学ぶ学生たちは、『游学訳編』（1902年10月創刊）・『湖北学生界』（1903年1月）・『浙江潮』（同年2月）・『江蘇』（同年4月）など留日学生同郷会の編集にかかる啓蒙雑誌、鄒容『革命軍』（1903年5月）・章炳麟「康有為を駁して革命を論ずるの書」（1903年）・陳天華『猛回頭』『警世鐘』（1904年）などの革命宣伝小冊子の購読を通して、また義和団出兵以来東北（満州）を占領しているロシアにたいしその撤退を求めて組織された拒俄義勇隊への参加を通して、排満共和をめざすブルジョア民主主義革命の担い手となり、革命的知識人の結集が進んでいった。⁽¹⁾

湖北もまた例外ではなかった。当時武漢は、湖広総督張之洞の新政の中心であり、いろいろな学校が建設され、学生数は1万を数えた。⁽²⁾日本に留学する学生も多かった。1902年の留日学

生500余名のうち、その多くは湖北出身であり、東京だけで100名近くいたとい⁽⁴⁾う。『湖北革命知之録』の著者張難先の言を借りれば、呉禄貞・傅慈祥・戡翼翬・劉成禺・居正・田桐ら湖北出身の学生たちは、日本や欧州への留学のなかで「孫文の主義と計画」に共鳴し、「主義の実行」にむけて邁進していったのである。湖北留日学生として弘[宏]文学院（院長嘉納治五郎）に在籍した李書城は、当時の模様を次のように回想している。

学院の同学は、みな毎晩のように自習室で立憲と革命の問題を討論した。はじめは双方の議論が激しくたたかわされたが、やがて排満革命を主張するものが多数を占めるようになった。⁽⁵⁾

清国最初の官費留学生13名の一人として来日した戡翼翬は、1900年12月東京で『訳書彙編』（月刊）を創刊し、ルソー、モンテスキュー、J. S. ミル、スペンサーらの著作を漢訳して掲載した。この雑誌は、『新民叢報』の编者から「西学を研鑽する者の一助とするにたる」雑誌と評されたように、留日学生にたいする新学説・新思想の宣伝に重要な役割を果たした。⁽⁶⁾ また翌1901年5月、戡翼翬・沈翔雲らは『国民報』（月刊、東京）の創刊にも参画した。この雑誌は、保守・立憲を批判し排満革命を鼓吹した留日学生界最初の革命刊行物である。⁽⁷⁾

このようななかで湖北留日学生たちの結束が生み出された。湖北留日学生同郷会・湖北学生界社の設立がそれである。1903年1月、彼らは「東西の学説を輸入し、国民の精神を喚起する」ことを目的とする排満の月刊雑誌『湖北学生界』を創刊した。⁽⁸⁾ その編集には劉成禺・藍天蔚・李書城・万声揚・金華祝・李步青らがあたった。『湖北学生界』は、「愛国はまず愛郷から」「湖北人の湖北を」をスローガンとし、「世界の知識と民族主義で内外の学生を覚醒させる」ことをめざし、湖北の友人・知人・親戚・学校にそれを送付し、大きな反響を呼んだ。⁽⁹⁾ とくにこの年の夏、拒俄義勇隊（隊長藍天蔚、のちに改組されて軍国民教育会）に結集した革命的な留日学生たちは、「分省起義」の戦略のもとに宣伝・蜂起・暗殺の実行員として相次いで帰国することになった。

湖北の留日学生たちは、さまざまな手段で大量の革命宣伝物を国内に持ち込むとともに、軍・学両界にむけて省内での印刷・配布・宣伝を行なった。彼らは、上海に昌明公司（総理万声揚）をつくり、表面上は書店を装いながら、ひそかに湖北に革命出版物を搬送したり、湖北からの留学生の世話をしたり、また国内外の仲間との連絡場所としていた。⁽¹⁰⁾ 武漢では、楽群印刷社を設立して『革命軍』『猛回頭』などの革命パンフレットを印刷したり、武庫と呼ばれる閲覧室形式の会所を設け、仲間との連絡や集会の場所とした。⁽¹¹⁾ その中心にいたのが劉静菴・李亜東らである。また呉禄貞・金華祝らは、スライドと幻灯機を武漢に持ち帰り、それを用いて講演活動を展開し、おおいに効果をあげたとい⁽¹²⁾う。

多種多様な宣伝活動を通して湖北の革命運動は急速に発展した。曹亜伯・劉静菴・呂大森らは、自立軍蜂起の失敗（1900年8月）を教訓として、革命工作のあり方について次のような認識をもつにいたった。

会党はたしかに発難させやすい。しかし成功すれば、ほしいままに振る舞い、制しがたい。成功しなければ、騒乱を激しくするだけである。⁶⁶したがって軍隊に働きかけるとともに、自らが兵士となることである。⁶⁷

湖北は、袁世凱の北洋とならぶ新軍編成の中心であった。辛亥革命前夜の湖北新軍は、第8鎮（統制張彪）と第21混成協（協統黎元洪）からなり、1万5千余の兵力を擁していた。新軍は士官はもちろん、下士官にいたるまで一定以上の知識水準が求められていたことから、知識人の入営が一種の風潮となっていた。このようななかで革命的なインテリ青年が、新軍にはいり、兵士の間で革命思想を宣伝し、彼らを組織していったのである。張難先・胡英は第8鎮工程隊に、劉静菴は第21混成協馬隊にそれぞれ潜入し、『猛回頭』『革命軍』などの宣伝小冊子を武器として、新軍兵士にたいする排満革命の啓蒙活動をひそかに行なった。彼らは、軍・学両界の連絡機関として1904年4月7日、武昌多宝寺街に科学補習所を組織した。所長に武高等学堂学生呂大森、総幹事に工程隊の胡英、宣伝担当に兩湖書院出身で教員の曹亜伯、文書担当に文普通学堂学生宋教仁らが推挙された。科学補習所は、表向きは「科学の研究」を標榜していたが、実際は「革命排満の4字」が会員の密約となっていた⁶⁸のである。

科学補習所は、軍界と学界のそれぞれの革命活動を調整し統一する役割を担っていた。湖北新軍内において革命の宣伝と同志の獲得につとめる⁶⁹一方で、学校にも積極的な働きかけを行なった。各部隊・各学校ごとに幹事を置き、会党との連携を模索したり、海外や国内各地の革命機関との連絡工作をも精力的に行なった。とくに湖南の華興会とは密接な関係をもった。黄興の提起した、1904年11月16日の西太后万寿節に乗じて長沙で蜂起する計画にたいし、科学補習所のメンバーはこぞって呼応することを表明していた。しかし10月中旬この計画が長沙で露見し、10月28日科学補習所もこれに関与した疑いで湖北官憲の搜索を受けたが、すでに長沙からの知らせによって、いち早く機密書類を焼き捨てて避難していたためにことなきをえた。事件は、表面に名の出た文普通学堂学生の宋教仁・歐陽瑞驛の二人の学籍が剝奪されただけで終息したが、科学補習所の活動そのものは停止を余儀なくされた。

1905年8月東京で中国同盟会が成立すると、武昌では旧科学補習所の会員たちによって、新たに日知会と呼ばれる革命組織がつくられた。日知会は、もともと武昌高家巷の聖公会内に、民智を啓蒙するために設けられた新聞・雑誌・新書の閲覧部屋の名称である⁷⁰。ときに武昌聖公会牧師胡蘭亭は革命運動に好意的で、補習所への弾圧によって軍営を出ざるをえなくなった劉静菴を、1905年夏日知会の責任者として迎え入れ、その運営を任せたとである。劉静菴は、会内の新聞・雑誌・図書を充実させ、閲覧者にたいするサービスにつとめるなど、おおいに会務を進展させるとともに、講演会活動にも力をいれた。土曜・日曜に開かれた講演会では、活動写真の放映、物理・化学の実験、時局の講演などを行なった。演説も世界の趨勢や祖国の危機から説きおこし、革命の必要性を暗示したり、ときには革命を宣伝するにいたった。⁷¹

日知会の周囲に、補習所の旧メンバーはもとより学生・教員・軍人ら革命に心を寄せる人々

が集まってきた。やがて彼らのなかから日知会を明確に革命をめざす組織として改組しようとする動きが起こり、1906年旧暦1月革命結社日知会が誕生した。軍界・学界・新聞界・宗教界から集まった100余名は、総幹事に劉静菴、評議員に陸費逵・馮特民（ともに新聞界）ら、幹事に朱子龍・李亜東（ともに軍界）らを選出した。

前年の8月に結成された同盟会の東京本部は、本国の革命勢力との関係を強化することをめざしていた。日知会改組直後には、同盟会湖北分会長余誠が武漢に帰り、日知会との連携をへなかった。日知会と同盟会のつながりについて、張難先は次のように述べている。

日知会の会務は同盟会の指導をえて、その声勢はさらに大きくなった。表面上は日知会と称したが、内容は実は同盟会であった。

日知会は、華興会・科学補習所の失敗の経験から、会党との関係を捨てて軍界と学界の知識人に工作の力点を置くとともに、活動の武器であった講演会も、秘密保持の立場から回数を減らし、地下活動に重点を移していった。また日知会自体は、湖北における革命黨員相互の連絡機関的存在であり、まとまりのある強固な革命組織ではなかったために、一方では個々の革命黨員が個人的・同郷的なつながりのなかで、それぞれ独自の組織をつくって活動していた。それは、学社・公寓・公学・報館・書舎などと呼ばれるものである。彼らはそこを拠点として革命のための教育・宣伝を行なうとともに、図書の販売や同志間の連絡場所とした。黄冈出身にして武昌の学校・軍隊に籍を置く者を組織した熊十力（陸軍小学堂学兵）らの黄冈軍学講習社、安陸府下の県人にして武昌在任の軍学界人士を結集した彭養光（兵士）らの安郡公益社、梁耀漢（陸軍予備学堂学生）らの群学社・明新公学、余誠・李亜東らの東游予備科・江漢公学、時功璧（方言学堂学生）らの教育図書社などがそれである。

こうした動きが官憲の眼にとまらぬはずはなかった。1906年旧暦4月、活発な講演活動や宣伝工作、軍隊内での秘密組織の拡大をはかっていた黄冈軍学講習社に弾圧が加えられ、解体された。日知会もまた省当局の厳しい監視下にあった。1906年12月江西・湖南の交界萍郷・瀏陽・醴陵で革命蜂起が敢行されると、これに関与したとの疑いで、翌1906年1月日知会は弾圧を受けた。これによって劉静菴・張難先・胡英・梁鐘漢・呉貢三・李亜東・殷子衡・朱子龍・季雨霖の9名が逮捕・投獄され、余誠・孫武・梁耀漢・馮特民ら10名が指名手配されて、湖北の革命運動は大きく後退することになった。

日知会の誕生によって「（湖北の）革命の進展の度合は、実に一日千里の勢いであった」という。しかし弾圧によって、あれほど盛んであった学社・公学もそのほとんどが消滅し、メンバーもシンパも四散してしまった。そのなかでわずかに安郡公益社のみが、新公益社と改称して存続し、獄中の仲間の救援あるいは国内外の連絡の機関として重要な役割を果たし、彼らの活動は、湖北軍隊同盟会・群治学社などの結成につながる布石となった。公益社の他にも、日知会の旧会員らの組織した、数人から数十人規模の小団体が20余り存在し、革命の火種を守り続けていた。また清朝当局による日知会の弾圧は、聖公会のバックにあるアメリカの圧

力の前に不徹底なまま終わった。劉静菴らは極刑を免れ、獄中での扱いも寛大で、面会の制限がゆるめられたり、夜間の外出が自由に行なわれたりして、監獄があたかも革命参謀部の様相を呈していたという。

このような状況のなかで湖北新軍内における革命運動が再燃してきた。1908年7月、旧日知会会員で第41標第3營の兵士任重遠らは、漢陽の獄中にあった李匪東らの日知会の旧友とはかって湖北軍隊同盟会を結成し、新軍の兵士・下士官らの組織化に乗り出した。これは、湖北の革命派が新軍内に自らの革命組織をつくった最初であり、後の「文学社の胚胎」となった。しかし軍隊同盟会は、組織の中心であった任重遠らの転出と、漢陽の監獄を往来する軍人が多く当局の嫌疑を受けたことから、会務の停頓を招くにいたった。

ときに光緒帝・西太后が相次いで逝去し、一方では安徽で新軍が蜂起するなど、世情の不安は高まっていた。この機会を利用して、1908年12月軍隊同盟会の黄申薈・楊王鵬・章裕昆らは、軍隊同盟会を群治学社に改組して活動を再開するにいたった。群治学社は、その設立宣言のなかで、中国は積弱無能のために台湾・朝鮮を失い、今や危機存亡の時にある、眠れる獅子に猛醒を促し、既倒の狂瀾を挽くために直ちに決起せよ、と訴えた。この結社は、表向きは「多数の人の知識を集合して、学問を研究し、自治を提唱する」ことを宗旨としたが、日知会の弾圧の経験を生かし、新規の加入にあたっては3人以上の紹介を義務づけ、将校の加入を原則として認めなかった。また経営の苦しかった漢口『商務報』（主筆詹大悲）に学社の積立金を融資し、それを群治学社の機関紙とした。漢口『商務報』は、時局の動向や新軍内の不法行為などを積極的に取り上げ、その言論は過激をきわめ、漢口言論界では「革命の急先鋒」といわれた。群治学社は1年9か月にわたって革命工作を持続させ、新軍の革命化に大きく貢献したが、それを支えた背景には、組織としての厳格さ、機関紙による公開のキャンペーン、宣伝に際し愛国主義に訴えて革命の言質を避けたことなどがあげられる。

しかし1910年春、群治学社は官憲の注目を引くことになった。一つは、漢口『商務報』が清朝の鉄道借款に反対する論陣をはったこと、もう一つは長沙米騒動（1910年4月）に呼応する計画が洩れたことなどによる。そのため群治学社は湖北当局の厳しい追求と監視を受け、活動は停滞を余儀なくされた。そして同年9月、李六如・祝制六・楊王鵬・章裕昆らは、結社を振武学社と改名して革命組織の再構築をはかったが、当局の追求を免れることはできず、学社の中心であった楊王鵬・李六如らが新軍を除籍されるにいたった。

湖北の革命運動は、再び組織の建て直しにせまられた。振武学社の成立とともに第41標第3營に入隊した蔣翊武・劉復基、そして詹大悲らは、1911年1月30日振武学社を文学社と改め、表面上は「同志を連合して文学を研究する」ことをスローガンに掲げ、蔣翊武を社長とする執行部と各標の代表などを選任した。文学社は、当初群治学社以来の入社捐1元、月捐俸給10%の規定を継承したが、負担の重さを考慮し、役員・幹部以外の社員にはそれを義務づけないことにした。また詹大悲らが漢口『商務報』を受け継ぐ形で創刊した『大江報』を文学社の機関

紙とし、官庁の腐敗無能を暴露する記事や過激な社論を掲載し、部数をのばしていた。⁽⁴³⁾ 文学社は、こうした組織の大衆化を進めるなかで、2月には400余名⁽⁴⁴⁾、6月には2000名近く⁽⁴⁵⁾、8月には3000名余りを擁するにいたり、社員は湖北全軍に及んでいた。

辛亥革命前夜の湖北では、文学社と共進会⁽⁴⁶⁾の二大革命結社の一挙一投足が、政局に重要な影響を与えるようになっていた。それは1911年6月両革命組織が合作し、9月には統一司令部を持つにいたったことによる。ここで合作にいたる経緯を簡単に述べておくことにする。

両者の合作には、宋教仁・譚人鳳らによる中部同盟会の結成（1911年7月）にむけての動向と、彼らの革命方略が深くかかわっている。宋教仁らは、中国同盟会内の広東グループによる、南方を主とした武装蜂起路線にたいし、以前から疑念を表明していた。1910年夏、宋教仁は、東京で今後の革命運動の進め方について上中下の三策論を提起して衆議にかけた。⁽⁴⁷⁾ 上策とは北方（北京周辺）における中央革命論、中策とは揚子江流域の各省が同時に挙兵するという長江革命論、下策とは東三省・雲南・両広を拠点とする辺境革命論である。⁽⁴⁸⁾ 討議の結果、長江革命論を採用することになり、その指導機関として中部同盟会を組織することを決め、その重点地区を武漢・南京とすることを確認した。⁽⁴⁹⁾ 同年10月、譚人鳳はこのことを黄興に伝えるため香港に赴いた。ときに黄興は、孫文・胡漢民らと広州黄花岡蜂起（1911年4月）の敢行にむけて奔走していた。そのため譚人鳳は、中部同盟会の結成について黄興の了解をえることができなかったが、黄興らの蜂起計画に長江流域諸省が組織的に呼応することで中部同盟会の実体を示すことにした。⁽⁵⁰⁾

譚人鳳は、上海で宋教仁・陳基美らと協議の後、南京・九江・長沙を遊歴し、広州の蜂起に響応を呼びかけるオルグ活動を行なった。とくに1911年2月から3月にかけて譚人鳳は、中部同盟会（当時は未結成）の名称を用いながら、両湖における革命組織の結集につとめていた。武漢では、共進会湖北分会（1909年4月成立）の領袖孫武や居正らに活動資金を提供する一方、彼らをともなって獄中にあった文学社の幹部胡瑛との接触をはかった。また湖南方面でも、共進会湖南分会の焦達峯・謝介僧・劉承烈・鄒永成らと両湖同時蜂起をめざして連絡をとりあった。

1911年4月中国同盟会の総力をかけた広州黄花岡蜂起の失敗は、譚人鳳・宋教仁らの長江革命論の推進およびその中心機関としての中部同盟会の結成にはずみをつけた。譚人鳳は、まず文学社と共進会の合作にむけて革命工作を開始し、1911年5月11日には両組織がはじめて協議する場を持つにいたった。文学社からは劉復基・王守愚・蔡大輔らが、共進会からは楊玉如・楊時傑・李作棟らが参加した。⁽⁵¹⁾ その後も合作の話し合いは続けられ、6月にはいると、譚人鳳は、両派が和衷共濟し、相輔けて行動することを提起し、ついに両団体は同盟会の章程に照らして組織し直すことで合意するにいたった。⁽⁵²⁾ こうして中部同盟会本部の成立に先だって、中部同盟会湖北分会が成立し、続いて湖南にも分会が生まれた。譚人鳳はさらに湖口・九江・安慶・南京をまわって長江流域における組織化の根回しをほぼ完成させ、これを受けて1911年7月31

日上海で中部同盟会の設立大会が実現したのである。

ところで文学社と共進会は、その構成メンバーの出自の相違からくる反目があった。両者はそれぞれ独自の革命方略を持って独自の組織を編成してきた。文学社は、科学補習所の系統を引く革命結社で、下級兵士を組織の母体としていたの⁶⁷⁾にたいし、共進会は、地主・富豪出身の知識人・学生を中心に、会党を包摂した革命結社であった。いずれにせよ、合作後の両派は、上部機関に中部同盟会を仰ぎ、その事権統一と責任分担の主旨に基づいて同心協力する体制がとられたのである。⁶⁸⁾ 9月14日、文学社と共進会は、武昌蜂起にむけて統一機構を組織することを決め、軍事面では蔣翊武（文学社）を総指揮に、孫武（共進会）を参謀長に、政治面では劉公（共進会）を総理とした。⁶⁹⁾ 9月24日には、蜂起を中秋節の10月6日と決定し、革命軍の臨事総司令に蔣翊武を選任するにいたった。⁶⁹⁾

以上、湖北における革命運動の分析を通して、文学社がそれに先行する革命結社の組織と伝統を継承して生まれた組織体であったことを確認することができる。

3

湖北に誕生した革命結社の会員数は、『湖北革命知之録』の名簿によると、科学補習所所員が48名、日知会会員が118名、公益社社員が49名、湖北軍隊同盟会会員が32名、群治学社社員が54名、振武学社社員が78名、文学社社員が165名である。また文学社社員165名のなかで、旧日知会会員が26名、湖北軍隊同盟会・群治学社・振武学社に参加した会員が45名おり、それは文学社社員の3分の1を占めている。⁶⁹⁾ 文学社の指導部をみてもそれは明瞭である。社長蔣翊武は中国同盟会・群治学社・振武学社に、副社長王憲章は日知会・振武学社に、文書部長詹大悲は群治学社・振武学社に、評議部長劉復基は中国同盟会・日知会・群治学社・振武学社に、文書担当の王守愚・蔡大輔、会計兼庶務担当の鄒毓琳の3名は軍隊同盟会・群治学社・振武学社にそれぞれ参加していた。⁶⁹⁾ これは、文学社が湖北の革命運動から生まれた結社の革命的伝統を継承し、また中国同盟会と相互に交流しあいながら発展してきたことを示している。

文学社は、武装蜂起にむけての実戦的な革命組織をつくるにあたって、新軍の編成系統をうまく活用してきた。新軍の各隊・各營・各標単位ごとに代表者をあげ、それぞれに責任をもたせた。彼らが實際上各クラスの戦闘指揮官であり、文学社の中核を構成していたのである。また革命遂行に関する重要事項は、各標の代表者会議で決定され、それが事実上の最高権力機関であった。伝達命令は標・營・隊の縦系列を用いて行なわれ、各標・營・隊がそれぞれ横の関係をもつことはなかった。⁶⁹⁾

湖北の革命結社に参加したメンバーは、新軍兵士・学生・知識人と会党であったが、それは、湖北における革命運動の高揚と停滞の波動のなかで変化した。科学補習所の基本構成員は、新軍兵士と青年学生と一部の会党であった。日知会は、科学補習所が解体するにいたった反省のうえにたつて会党との連携を避け、革命工作の重点を軍・学両界に置いたのである。⁶⁹⁾

れによってメンバーに変化があらわれ、日知会の主力は、学生・知識人・新軍兵士となった。群治学社は、日知会が将校をも工作の対象としたことによる失敗を教訓にして、新規加入者には3人以上の紹介者を義務づけ、将校の加入を認めないことにした。群治学社のメンバーは主として新軍中の下士官と一般兵士であった。振武学社も文学社も、群治学社の原則を踏襲している。群治学社に参加した温楚珩の回想によれば、「隊内の同志は半数を越えたが、その工作対象はみな下士官・兵士で、将校に参加をすすめることはなかった。組織の厳密さが想像できるであろう」と。文学社も兵士をその基本メンバーとしていた。李六如の回想によると、文学社成立後「半年のうちに、革命風潮が全国的に高揚し、輻重隊第8営を除く湖北新軍の各鎮・協、各標・営・隊のなかに（文学社の）細胞組織が生まれ、文学社籍の兵士が多数を占めるにいたった」と。

湖北新軍は、もともと清朝政府の反革命武装集団である。その担い手である兵士たちがなぜ文学社に加入し、反清革命の道を行っていったのだろうか。

第一は、新軍兵士の出自に由来する。新軍兵士は、その大半を農村の土着の子弟をもって編成された。彼らは字の読める、素質のよい兵士であり、多くは中小地主の出身であった。彼らは、農村において新政・憲政の施行にともなう税の過重負担に直接苦しんでいた階層である。それが、彼らをして革命宣伝にすばやく反応させる素地となっていたと思われる。新軍の兵士は、軍服を着た没落農民、失学青年らの組織であった。ときに富国強兵のかけ声と秀才の入営が一種の風潮となるなかで、新軍の士気はきわめて高かったといえる。彼らは、新軍内にオルグとして潜入した革命派によって啓蒙されて民族的自覚を高め、革命の戦列に加わっていったのである。

第二に、新聞・雑誌・小冊子の刊行物、講演会、小組（グループ）などを利用した多様な宣伝工作をあげることができる。文学社は、革命情勢の急激な変化に対応できるように革命宣伝工作を合法と非合法の両面から展開した。まず新軍内に「学術研究小組」をつくって活動をカムフラージュした。小組では、各人がお金を出し合って『大江報』『民立報』や革命パンフレットなどの購入費、日常の活動費などにあてた。また夜の自習時間、日曜午後の自由体操の時間などを利用して集まり、兵士たちに革命の大義を鼓吹した。文学社は、機関紙『大江報』を用いて革命宣伝を合法的に行なった。各営ごとに販売所と特約通信員を置き、兵士の関心と要求を汲み上げる紙面づくりをしていた。『大江報』は、武漢の官界・軍界内の不正腐敗の内幕を詳細に暴露したため、官僚や将校たちは「新聞を畏れること虎の如し、新聞を恨むこと刺骨の如きありさまであった」が、兵士たちにはおおいに歓迎され、売れ行きも上々で、『大江報』にたいする彼らの「信仰はますます深まり、期待はますます強まった。」それは、新軍兵士の啓蒙と覚醒、結集に貢献したのである。

第三に、革命のリーダーたちの愛国に満ちた不屈の闘志をあげることができる。蔣翊武は「革命を行なって清朝を打倒しようとするならば、軍界に身を投じ兵士と連携する以外に方途

はない⁽⁶⁾」、劉復基も「祖国の復興のために闘い、釜茹での刑を受けようとも懼れはしない⁽⁷⁾」と、その決意のほどを吐露している。彼らは、中華を恢復するために水火も辞せぬ壮烈な革命精神をもって奮闘し、そのために自己の青春をささげること惜しまなかったのである。

文学社は、科学補習所以来の革命結社がおかしてきた誤りを教訓とし、組織の拡大にはときとして慎重であった。すでに述べたように権力からの組織破壊を防ぐために、入会手続・資格を厳格にし、革命結社としての純潔性を保持することにつとめた。湖北革命派の長期にわたる苦闘に満ちた革命工作によって、湖北新軍1万5千余の兵士のうち3分の1が革命派の影響下に置かれ、その5分の3が文学社社員となった。武装蜂起を総括した張難先が語っているように「政府の軍隊を知らず知らずのうちに悉く我が（革命）党の勢力に変えてしまった⁽⁸⁾」のである。湖北革命運動の総決算ともいべき武昌蜂起のなかで、文学社の占める位置はきわめて高かったといえよう。

4

文学社は明確な独立した政治綱領を持たなかったけれども、中国同盟会の政治綱領を綱領とし、終始その革命綱領の実現にむけて奮闘していた。

まず文学社に先行する湖北の革命結社の政治綱領について検討しておく。同盟会成立以前に組織された科学補習所は、すでに「排満革命」のスローガンを掲げ、清朝打倒のための工作活動を展開してはいたが、まだ完全な政治綱領を持っていたわけではない。同盟会結成後、湖北の革命工作の任務を帯びて武漢に入った余誠（同盟会湖北分会長）は、日知会の劉静菴ら湖北の革命青年たちとの交流を深め、そのなかで彼らに同盟会の綱領「三民主義」の宣伝と啓蒙を行なった⁽⁹⁾。これを契機に日知会は、同盟会の綱領を宣伝するための湖北の拠点となった。

日知会の封閉以後、相次いで組織された革命結社もみな、「孫文の三民主義を高く掲げ、清朝の専制を推翻し、民国を建立することを唯一の目的としていた。」したがって湖北の革命結社は、あらためて政治綱領を掲げる必要を認めなかったし、湖北革命派の面々は、暗黙のうちに孫文を革命の領袖とし、三民主義を共同の綱領と考えていたのである。文学社も、同盟会の政治綱領を自らの綱領と認めていた。文学社社員万鴻階の回想によれば、「文学社の成立大会において新しい綱領は提出されなかった。なぜなら大会に参加した同志たちは、文学社の設立の目的が清朝の専制支配を打倒し、康有為・梁啓超の保皇政策に反対し、孫文の革命主張を擁護することにあると考えていたからである⁽¹⁰⁾」と。楊玉如もまた、文学社は革命を實踐するなかで、終始「孫文を遙かに推戴して総理とし、同盟会の『驅除韃虜、恢復中華、建立民国、平均地権』の綱領をもって党綱とした⁽¹¹⁾」と述べている。これは、明らかに文学社が同盟会の綱領を政治綱領としていたことを示している。

文学社の機関紙『大江報』も、社員の講演などによるオルグ活動も、みな同盟会の革命綱領にしたがって行なわれていた。彼らによる排満共和の呼びかけは激烈であった。文学社社長蔣

翊武・副社長王憲章の新軍兵士にたいする宣伝教育は、きわめてアジティショナルなものであった。満州王朝への憤激を次のように激しい口調で語っている。

満清政府の官吏は腐敗無能、権を喪い国を辱められ、民を食いものにし、漢族の山河をかすめとっている。・・・我が鎮の各標營の旗籍の将校・兵士は、2人前の給料をとり、その他総ての面で漢人以上に優遇されているのに、我が漢人にたいし二百余年にわたって君恩に浴してきたなどというのである。・・・我々は種族革命を実行し、漢族を復興し民を救い国を救う以外に何の方法があるか。⁶⁸⁾

1911年7月兩湖・四川での保路運動が高揚し革命情勢が成熟しつつある時、『大江報』は、武漢の官界を震え上がらせる時評「大乱は中国を救済する妙薬」を登載した。そこでは清朝政府の統治を、「総てにわたって死機が現れ、到る処が死境となっている」とか、「治る見込みのない疾いにかかり、施す術のない」「病夫」であるとか、「まさに陽の西山に落ち、氣息奄々、滅亡の日を迎えんとする境地にある」と痛罵し、今こそ「愛国の志士」「愛国の健児」たちが決起して「ルールなきの大乱」を起こそう、と呼びかけた。これは、「大乱」があり「革命」があって、はじめて中国を救うことができることを明確に表明したものである。

文学社の社員たちも、革命宣伝工作のなかで『大江報』『民立報』などの新聞・雑誌や『革命軍』『警世鐘』『黄帝魂』などの小冊子を積極的に利用し、清朝専制支配の腐敗墮落ぶりや清朝が「洋人の朝廷」と化した現状を、朝鮮やインドの亡国の惨状と対比させながら諄々と説きおこし、今こそ祖国防衛のために立ち上がらなければ、亡国の惨過を招くであろう、と訴えた。それは兵士たちの愛国・救国・革命にたいする情熱を奮いたたせ、革命戦線の拡大に効果をあげた。

武昌・漢陽・漢口の3地区からなる武漢は、揚子江の中流に位置し、先には「九省通衢」の地と称され、経済的にも文化的にも比較的発達した地域である。1858年の天津条約によって開港場となった漢口は、列強の侵略の拠点として重要な位置を占めたし、武昌は、清朝統治のうえから政治的にも軍事的にも要衝の地であった。それと同時に、進歩的な思想をいち早く受容し、革命的な知識人の集中していた地方でもある。その意味で、武漢は革命と反革命をめぐる激しい攻防が展開されてきた地域である。したがって湖北の革命派は、革命組織の結成や革命思想の宣伝にあたり、非合法による闘いを余儀なくされてきた。革命結社の設立にあたり、表向きはその宗旨・目的を「科学の研究」(科学補習所)、「民智の開通」(日知会)、「学問の研究・自治の提唱」(群治学社)、「武学の講求」(振武学社)などに求め、結社の真の意図や目的を明示することを避けていた。これは、「実は意は官府の耳目をカムフラージュする」ことにあった。文学社の主宰者蔣翊武も、振武学社から文学社に改組する時に、文学の研究を媒介として同志を組織することを表明している。文学社は、革命情勢の高揚のなかで、非合法と偽装による闘いをしいられていたために、政治綱領をはっきりと掲げることができなかった。それは、権力による厳しい監視のなかであって組織を防衛するためにはやむをえないことであっ

た。しかし兵士にたいする革命工作活動のなかでは、同盟会の綱領を自らの政治綱領としていた。したがって文学社は、中国同盟会と同じ基盤にたつ革命結社であり、それは単なる兵士の組織ではない。文学社の兵士たちは、孫文を革命の領袖とし、三民主義を指導理念とし、同盟会の政治綱領の実現をめざして奮闘したのである。

〔註〕

- (1) 張難先『湖北革命知之録』（商務印書館，1946年）238頁。
- (2) 小野信爾「辛亥革命と革命宣伝」（小野川秀美・島田度次編『辛亥革命の研究』筑摩書房，1978年），中村哲夫「拒俄義勇隊・軍国民教育会」（『東洋学報』54-1，1971年），同「華興会と光復会の成立過程」（『史林』55-2，1972年）参照。
- (3) 中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『辛亥革命回憶録』1（中華書局，1961年）186頁。
- (4) 『湖北学生界』1903年1期「留学記録」「湖北同郷会縁起」。
- (5) 『湖北革命知之録』18頁。
- (6) 『辛亥革命回憶録』1，180頁。
- (7) この雑誌は、中国人のものとしては最初の洋紙両面印刷・洋式製本によるものであった。さねとうけいしゅう『増補中国人日本留学史』（くろしお出版，1970年，初版 1960年）301頁参照。
- (8) 『新民叢報』1902年6期「紹介新著」。
- (9) 方漢奇『中国近代報刊史』上（山西人民出版社，1981年）201～205頁。
- (10) 『湖北学生界』1期「湖北学生界開辦章程」。
- (11) 楊玉如編『辛亥革命先著記』（文化資料供応社，1798年，初版 科学出版社，1958年）10頁。
- (12) 『辛亥革命先著記』10頁。『辛亥革命回憶録』1，181頁。
- (13) 『建国月刊』1930年2-5，41頁。
- (14) 『辛亥革命先著記』11頁。辛亥首義同志会編『辛亥首義史蹟』（武漢日報印務部，1946年）33頁。
- (15) 『辛亥革命先著記』11頁。
- (16) 李廉方編『辛亥武昌首義記』（正中書局，1961年，初版 湖北通志館，1947年）4頁。
- (17) 『湖北革命知之録』55頁。
- (18) 科学補習所に関する記述は、註記のないかぎり『湖北革命知之録』「科学補習所始末」による。
- (19) 曹亞伯『武昌革命真史』上（上海書局，1982年，初版 中華書局，1927年）によれば、当時張之洞の募集した新軍兵士の大半は科学補習所の紹介によるものであったという（「自叙」4頁）。
- (20) 『湖北革命知之録』55頁。1904年旧暦6月，武昌を訪れた黄興の協力要請を受けたものである。
- (21) 日知会に関する記述は、註記のないかぎり『湖北革命知之録』「日知会始末」，『武昌革命真史』上「第2章武昌日知会之運動」「第7章武昌日知会之破案」による。武昌の日知会は、1901年武昌聖公会牧師黄吉亭が創設したもので、黄牧師の長沙聖公会転出の後を受け継いだのが胡蘭亭牧師である。長沙聖公会内にも、黄吉亭によって日知会がつくられ、黄興ら湖南革命派の拠点の一つとなっていた（『武昌革命真史』上「第1章黄克沙革命之失敗」）。
- (22) 中国人民政治協商会議湖北省委員会編『辛亥首義回憶録』1（湖北人民出版社，1957年）80頁。
- (23) これは『湖北革命知之録』（81頁），『辛亥革命先著記』（21頁）によるが、回憶録の多くは旧暦2月としている。
- (24) 『辛亥首義回憶録』1，79頁。
- (25) 『湖北革命知之録』82頁。
- (26) 同前，121頁。
- (27) 『辛亥首義回憶録』1，112頁。

文学部論集

- (28) 同前, 78頁。
- (29) この地にも沔陽では張難先が集城学校, 黄冈では呉貢三が日新学社を, 殷子衡が坪江閱報館・鳩詠書舎をそれぞれ経営した。『辛亥革命先著記』12頁。『湖北革命知之録』80, 82, 88頁。『辛亥首義回憶録』1, 80頁。
- (30) 『武昌革命真史』上, 135~137頁。『湖北革命知之録』80頁。『辛亥首義回憶録』1, 112頁。
- (31) 拙稿「萍瀏醴における革命蜂起について」(『東洋史研究』29-4, 1971年)参照。
- (32) 『湖北革命知之録』121頁。
- (33) 同前, 142頁。
- (34) 『辛亥革命先著記』22~23頁。李時岳『辛亥革命時期兩湖地区的革命運動』(生活・読書・新知三聯書店, 1957年)56, 59頁。
- (35) 『辛亥革命回憶録』6(中華書局, 1963年)48~49頁。『辛亥首義回憶録』2(湖北人民出版社, 1957年)18, 40頁。同書3(湖北人民出版社, 1958年)23頁。
- (36) 湖北軍隊同盟会の記述は、『湖北革命知之録』「湖北軍隊同盟会始末」による。
- (37) 『辛亥革命先著記』18頁。
- (38) 群治学社の記述は、註記のないかぎり『湖北革命知之録』「群治学社始末」による。『辛亥革命先著記』32頁。
- (39) 『辛亥革命先著記』18~19頁。
- (40) 章裕昆『文学社武昌首義紀実』(生活・読書・新知三聯書店, 1952年)11頁。
- (41) 拙稿「長沙米騒動と民衆」(『名古屋大学東洋史研究報告』1, 1972年)参照。
- (42) 『辛亥革命先著記』18~19頁。
- (43) 振武学社に関する記述は、『湖北革命知之録』「振武学社始末」による。『辛亥革命先著記』20~21頁。『文学社武昌首義紀実』13頁。
- (44) 文学社の記述は、『湖北革命知之録』「振武学社始末」による。
- (45) 『文学社武昌首義紀実』17~23頁。
- (46) 『辛亥革命先著記』21頁。
- (47) 『辛亥首義回憶録』1, 121頁。
- (48) 『民立報』1912年10月7, 8日号「武漢革命団体文学社之歴史」。
- (49) 拙稿「湖南革命派の形成過程について」(『佛教大学人文学論集』23, 1989年)参照。
- (50) この集会は東京小石川で催され, 11の省代表をはじめ100余名が参加した。主宰者である宋教仁・譚人鳳らの意向を反映して, 会は反孫文の空気に満ちていたという。中部同盟会については, 松本英紀「中部同盟会と辛亥革命」(『辛亥革命の研究』所収), 『湖北革命知之録』「同盟会中部総会与武昌首義」参照。譚人鳳「石叻牌詞叙録」(『近代史資料』1956-3)39頁。鄒永成口述「鄒永成回憶録」(『近代史資料』1956-3)93頁。
- (51) 「鄒永成回憶録」93頁。『湖北革命知之録』69頁。
- (52) 中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会學術論著編纂委員会編『革命先烈先進伝』(同会, 1965年)「居正行状」。
- (53) 李劍農『中国近百年政治史』上(台湾商務印書館, 1957年)229頁。
- (54) 『辛亥革命先著記』32~33頁。
- (55) 同前, 40頁。
- (56) 「石叻牌詞叙録」49頁。
- (57) 共進会の実体については註(49)の拙稿参照のこと。
- (58) 『湖北革命知之録』159頁。
- (59) 『辛亥革命先著記』46頁。
- (60) 『湖北革命知之録』247頁。『辛亥革命先著記』50頁。

文学社小論

- 61) 科学補習所から文学社にいたる7つの結社のうち、総てに参加した者はいないが、4つ以上の組織にかかわった者が16名いる。日知会から文学社の6組織に参加した人に祝制六、5組織にかかわった人に查佛光がいる。
- 62) 『湖北革命知之録』160～166頁。『辛亥武昌首義記』24～57頁。
- 63) 組織の編成方法などについては、『武昌革命真史』上、380～381頁に詳しい。
- 64) 『湖北革命知之録』147頁。
- 65) 同前、147、149頁。
- 66) 『辛亥首義回憶録』1、51頁。
- 67) 同前、309頁。
- 68) 波多野善大「民国革命と新軍」（『名古屋大学文学部研究論集』XIV、1956年）参照。
- 69) 拙稿「革命と反革命」（『鷹陵史学』15、1989年）116～118頁、120～122頁参照。
- 70) 『辛亥首義回憶録』1、50頁。
- 71) 『辛亥革命回憶録』2（中華書局、1962年）94～95頁。
- 72) 同前、49頁。
- 73) 『辛亥首義回憶録』1、52頁。
- 74) 同前。
- 75) 『辛亥革命回憶録』4（湖北人民出版社、1961年）13頁。
- 76) 『文学社武昌首義紀実』76頁。
- 77) 『湖北革命知之録』234頁。
- 78) 同前、55頁。
- 79) 『辛亥革命回憶録』2、57～48頁。
- 80) 胡鄂公『辛亥革命北方実録』（近代中国史料叢刊第53輯〈527〉、文海出版社、1970年、初版 1912年）31頁。
- 81) 『辛亥首義回憶録』1、19頁。
- 82) 『辛亥革命先著記』30頁。
- 83) 『辛亥首義回憶録』2、99～100頁。
- 84) 『時報』1911年8月6日号、『大江報』からの転載記事。
- 85) 『辛亥首義回憶録』1、121～122頁。
- 86) 『湖北革命知之録』55頁。
- 87) 詠簪「武昌両日記」（中国近代史資料叢刊『辛亥革命』V、上海人民出版社、1957年）39頁。

